様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　３月　３１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００７～２００９
課題番号：１９５３０７３４
研究課題名（和文）　イギリス新教育運動における教師の「行為コード」と専門職化に関する教育思想史的研究
研究課題名（英文）Historical research on 'Teachers' conduct' and professionalisation during the New Education Movement in Britain

研究代表者
山崎　洋子（YAMASAKI YOKO）
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号：４０３１１８２３

研究成果の概要（和文）：イギリス新教育運動の言説には、(A) 理想主義的な倫理的人格形成論、(B) 現実主義的な専門知識重視論、(C) 教育技術的な教授論が内在し、それらは教育行為の自律性を規定する。本研究では、中央政府刊行『教師の手引書』(1905)、新教育運動家らの刊行する雑誌（*The New Era,* 1920-1929, *Conference Report of New Ideals in Education* (1914-39) や P. ナンの *On Education*（1926, 初版：1921）から諸言説を抽出し、上記の(A)、(B)、(C) に類型化し、教師の専門性の特徴と専門職化の基礎論を解明した。教師の「行為コード」の概念化を導いたナンは、生物学と心理学の知見を教師に伝授し、それを理想主義の倫理的人格形成論の見地から個人主義の理念に融合させ、教師の専門職化の理論を形成した。それは、「市民としての個人・自己の全的発達」を教育目的と定め、「社会的文脈において個としての子どもを理解する能力」、「個性と遊びの意味を重視する態度」、「学校の役割を自覚的に捉える姿勢」によって構築されていた。また、これらの教育思想・理想は、全体としての人間の形成を可能にするという意味において、今なお有効性を発揮するということを、イギリスの教育実践者の視点を介在させることによって確認した。

研究成果の概要（英文）：The New Education Movement after the First World War in Britain deployed many discourses on the philosophy of progressive education that may be classified into three conceptual stages: (A) idealistic and moral theory on the formation of character; (B) realistic theory placing emphasis on professional knowledge; and (C) technical theory on teaching. These discourses served to regulate teachers' autonomy in conduct of teaching. In this research we analyzed a Government document *Suggestions for Teachers* written by Board of Education (1905) in UK and some progressivist documents, *Conference Report of New Ideals in Education* (1914-39) and *The New Era* (1920-29), in order to extract discourses on 'theory of aims of education', to classify them into (A), (B) and (C), and to clarify the process of teachers' professionalisation. Percy Nunn in his classic and highly influential book *On Education* (1926, First Pub.:1921) mainly focused on teachers' conduct and generated a theory of professionalisation as follows: (a) the aim of education is whole self-development as an individual and a citizen in social context; (b) the desirable attitude for teachers is respect for the individuality of each child and play; and (c) teachers should be 'reflective' and critical about the role of the school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	９００，０００	２７０，０００	１，１７０，０００
２００８年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
２００９年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
総　計	２，１００，０００	６３０，０００	２，７３０，０００

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：教育史
キーワード：イギリス新教育運動、パーシー・ナン、教師の行為コード、教師の専門性・専門化、進歩主義思想、理想主義的人格形成論、教育思想の両義性

１．研究開始当初の背景

(1) 一般に、教師の専門性の論議は、教員免許に必要な授業科目や教育実習の時間枠の拡大に終始する傾向がある。また、反省的実践家（ショーン）としての教師の行為内容がいかなる形でイギリスの教育実践を左右してきたかについての史的解明は、未だ手つかずの状況下にある。さらに、教育史研究は（研究上の没価値性、禁欲性も加わって）教育事象の解釈のレベルに留まり、具体的な教育実践には寄与しえない研究として捉えられがちである。が、しかし現代の教育実践の問題は、前史の影響下にあるため、極めて歴史的な問題である。

(2) これまで、「教師の資質・能力を高める必要がある」という主張は、教育行為論として具体化し得ず、大学の講義内容の改革や授業の増加、実践重視に終始しがちであり、また、教授技術や子ども理解の能力の向上といった漠然とした理論に帰着する嫌いがある。

(3) 筆者のこれまでの研究に基づけば、教師の専門性は、教育行為の中でいかに自律性を有しているか、そこに包含された要素がいかに実効性を発揮しているかに現れる。イギリスの場合、教師への訓練の必要性は、19 世紀の中頃から、教職の自律性は 20 世紀の初めから公文書で謳われていたが、その具現化は勅任視学官（HMI）のエドモンド・ホームズとロンドン大学教授の P パーシー・ナンが主導した「教育の新理想（New Ideals in Education）」の活動に負う。

(4) また、同様に、ホームズは、教師の自律性とそれに基づく専門職化の理論において、理想主義的かつ現実主義的な批判理論を展開し、ナンは理念レベルにおいて、個人に着目した教育論を展開していた。

(5) さらに 1980 年代から 21 世紀の世紀転換期まで、イギリスの学校現場では「進歩的な教育」や「子ども中心」を掲げる教師には、「子ども理解能力」と「カリキュラム編成能力」が確かな形でそなわっていた。

(6) 一方、日本の戦後の教師の専門職化の理論においては、専門職化に関する具体的な意味内容の検討に至らなかった、という反省がある。しかも、日本の教育改革には教育哲学や教育思想が不在である、との批判は恒常的に見られる。これらの理由として、イギリスの教員養成を三つのサイクルで提言したジェームズ報告書（1971年）の知見を十分に認識してこなかった点があげられている（佐藤学「教師教育の危機と改革の原理的検討－グランドデザインの前提－」『日本教師教育学会年報』第15号、2006）。実は、ここで着目されたジェームズ報告書は「教育の新理想」の参画者の活動を源流としていた。

２．研究の目的

これまでの研究成果を踏まえて、（1）20 世紀初頭のイギリス新教育運動において、学校教育実践を方向づけた教育目的と「教師の専門性」に関する言説（discourses）を抽出し、教師の「行為コード（code of conduct)」の観点から教師の専門性や自律性を規定するモメントと理念を析出し、次元・局面・内容などに着目しつつ概念整理と類型化を試み、それらの内容について考察を加え、思想的特徴を解明する。

その上で、(2) それらの教育思想の相互関係がいかなるものであったか、また教師の専門職化を支える理論的基盤がいかなる点にあったかを明らかにする。また、同時に、これらの歴史解釈や教師の専門性の理論が、現代においてどの程度の意味・意義を有しているかを、現代の教育実践者の見解を介して検証する。

３．研究の方法

まず、(1) 第一次史料 『教師の学習手引き書（*Suggestions for Teachers*)』(1905）、*The New Era* (1920-1929)、*Conference Report of New Ideals in Education* (1914-39)、P. ナンの *On Education* （1926、初版 1921）から新教育運動家の教育目的論に関する諸言説を抽出して３つに類型化する。その際の分析枠組みは、イギリスの研究協力者である Prof. Roy Lowe（ロンドン大学)と Dr. Peter Cunningham（ケンブリッジ大学）の研究知見、そして Mr. Gary Foskett (Eveline Lowe Primary School 前校長）の教育実践の知見

を参考にして構成する。次に、(2) 教職の自律性を方向づける教師の行動や態度、授業論、指導技術に関する言説を教師の「行為コード」として集約し、それらがいかに思想的に相関しているかを確認する。また、その際には、その実践的意味について調査することを目的に、イギリスの教育実践家（校長、指導主事など）に対してインタビューする。インタビューでは、解明された「行為コード」の現代的意義を確認し、同時に実践論との乖離についての意見も得る。そして、(3)「教師の専門性」の意味内容を形成する諸理論を抽出し、それに裏付けられた教師の専門職化の過程や意味内容を解明する。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

教師の専門性を方向づける「行為コード」を規定するのは、教師が有している「子ども理解」の能力である。新教育運動では従来の規範的な教育理想、すなわち、①道徳的な人間形成を可能にする倫理的な人間観に加えて、②生物学的・心理学的知見に方向づけられた教師のアプローチによって、子ども（人間）を個人（Individual）として捉えることの重要性が主張されたこと、そして、③それが「教師の専門性」の理論の骨格を形作ったことが明らかになった。教師の専門性は、④「市民としての個人・自己の全的発達」という崇高な教育目的の下に、⑤社会的文脈において、「個としての子ども」を理解する能力、⑥「個性と遊びの意味を重視する態度」、⑦「学校の役割を自覚的に捉える姿勢」の理論・理想で構築されていたことがわかった。

すなわち、新教育運動においては、教師の専門性は、子どもをトータルな存在として全体的に捉えつつ、個体としての個別性や個性に着目して子どもを捉えていく能力の形成、いわば「総合的な能力」の形成に向けられ、それは倫理学・哲学、生物学、心理学の各視点を教育学に導入し援用したものであった。

また、これらの教育理論・理想の今日的な有効性について、今日のイギリスの教育実践者、とりわけ子どもの立場から教育を組織化しようとしている教師の視点から捉えた。その結果、これらの教育思想は、知的・身体的・精神的な発達、すなわち全人的な発達を保証することができるという意味において、今なお有効性を発揮している、ということが教育実践者らによって言明された。

さらに、子どもの活動性に着目したイギリス新教育運動は、日本の大正期の自由教育運動に大きな影響を与えたわけであるが、本研究では、実は、交渉史的な観点からも詳細な検討を加えることができた。ホームズ、ナン、J. マッケンジーの「教育の新理想」の思想は、日本の新教育運動に影響を与えたが、子ども理解や個性概念のスタンス及びそれらの理解の仕方において、野口援太郎や野村芳兵衛のそれとは異なっていることがわかった。

またさらに、先に述べたように、教師の専門性は、新教育運動期に至って生物学の知見が加わったことによって支えられていたと解したが、この時期においても、教師の専門職化が容易ではなかったこともわかった。それは、教師の専門職化とは、教師が自らの教育行為において専門性を発揮するだけでなく、それが教師間で定着することをも意味するからである。その意味において、専門的な教育行為の定着に関しは、新教育連盟の年次会議がその役割を担った、ということも追確認することができた。

(2) 国内外における本成果の位置づけとインパクト

まず本研究は、国内的には、近代教育によって出現してきた教育問題の克服に向けて展開された「教育思想」の史的研究として位置づけることができる。近代教育は、周知のように、暗記中心、教科書中心、教師中心、訓練主義的、機械的といったタームで表現されるが、イギリスの新教育運動は、近代教育の理論が余りにも強力であったために出現した矛盾や問題を乗り越えるべく展開された、教員・視学官・教育学者主導の改革運動である。日本の教育思想史学の領域において近代教育が問い直されている昨今の状況を念頭に置くならば、それゆえ、イギリスの近代教育批判としての新教育運動の思想に、教師の専門性論が内在していたことを解明し得た本研究の意義は大きい。

次に、旧教育が採用した機械的で訓練主義的な方法は、合理的・効率的であることを意味するが、そのことはとりもなおさず、子どもを人間と見なさないばかりか、子どもの自由・活動性や、その具現化としての遊びを否定することであった、と結論づけたことを想起したい。ナンは子どもにとっての遊びの意味を、教育学の観点から真正面に取り上げて展開したわけであり、これまでのナン思想の研究には、この点が欠落していた。ナン思想の新知見を明らかにし得たという点を鑑みるならば、本研究の成果は日本における研究上の意義として位置づけることができる。

また、本研究成果を国際的な文脈で捉えるならば、交渉史的な観点から分析・考察を加えることを可能にし得たという点で、日本とイギリスの歴史・文化的背景の違いが教育思想の形成にいかに影響を与えるかの研究を可能にしたことがわかる。この意味において、とりわけ国際教育史学会における研究活動の有意性においてインパクトを与えるものとなった（本成果報告書の雑誌論文の項の１、

及びケンブリッジ大学での口頭発表)。

最後に、本研究のスタンスの特徴は、単に思想を叙述・解釈するだけでなく、新教育思想の系譜に位置づけることができるイギリス本国の教育実践を視野に収め、その上でイギリスと日本の現代的視点を介在させる、というところにあった。このスタンスによって、新教育という一つの歴史事象を対象にしたにもかかわらず、本研究では、近代教育思想史研究というスパンでその事象をトータルに捉えることが可能になった。そしてまた、その結果、歴史のダイナミズムが見出され、日英の新教育思想研究を進展させることにつながった。この射程の長さは、イギリス教育史学会の発表においても高く評価された。それゆえ、本研究は、今後も継続的に取り組む必要性と意義がある、ということができよう。

(3) 今後の課題と展望

本研究の今後の課題は、大別して３つ挙げることができる。それは、本研究の延長線上に位置づく新教育運動研究にかかわる２つの課題と、歴史描写・歴史解釈にかかわる歴史研究の課題である。

まず、本研究では、「教師の専門性」の構成要素である教師の「行為コード」の意味内容とそれらの専門性について解明した。が、教師の専門職化の具体的解明、すなわち各「行為コード」の内容をどのように測ることができるか、それらをいかに多くの教師に伝達するか、という点には立ち入れなかった。前者は、一般的に、教育行為の測定を意味し、具体的には、生徒に対してどのような試験をどのようにするか、その結果をどのように解釈するか、という行為を含んでいる。また、後者はその試験結果を教員集団・教育当局・親、さらには教育マスコミがどのように捉えるか、そしてその結果を各教師がいかに反省的に理解して、継続的に改善していくか、という行為全体を包摂する教育思想的な課題である。

したがって、本研究の次なる課題は、新教育運動における専門職化の過程の内実の検討である。そのためには、今後、新教育運動期に再燃した「試験論争」を取り上げて解釈する必要がある。

そして、その際に同時に検討しなければならないのは、新教育運動というミクロな歴史事象へのアプローチにかかわる方法論の問題である。それは、対象とする歴史を生み出したことに焦点を当てる歴史的・時代的視点と、それを問題視する研究者の現代的視点とをいかに統合・接合させるかという点である。このことは、歴史上出現した、一つの教育改革運動への迫り方に包含された歴史認識の問題であり、この点への顧慮なしには、教育史学の伸展は期待できないであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. Yoko YAMASAKI: The impact of Western progressive educational ideas in Japan: 1868-1940, History of Education (iFirst), HES, UK (Routledge Taylor & Francis), 査読有，Vol. 38. No. 6, 2010. 03, 1-14.
2. Yoko YAMASAKI, Gary FOSKETT: The Growth of the Self and the Role of the School in Developing Key Intelligences; Some Reflections (3) on Education by T. Percy Nunn, 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻『教育学研究論集』第 5 号，査読無，2010. 03, 1-14.
3. Yoko YAMASAKI, Gary FOSKETT: The Aims of Education and Individual Life; Some Reflections (1) on *Education* by T. Percy Nunn, 『武庫川女子大学紀要』査読無，第 57 巻，2009，1-8.
4. Yoko YAMASAKI, Gary FOSKETT: Individuality and Play in Education; Some Reflections (2) on *Education* by T. Percy Nunn,『武庫川女子大学紀要』査読無，第 57 巻，2009，9-17.
5. 山﨑洋子:イギリス新教育運動期における「時間割」と教師の専門性－クロノロジカルな時間をめぐる史的ダイナミズム－，武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻「教育学研究論集』査読無，第 4 号，2009. 03，9-28.
6. 山﨑洋子：Network on New Ideals in Education in England and Japan:1910-1940，武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻「教育学研究論集』査読無，第 3 号, 2008. 03，19-38.
7. 山﨑洋子：Ｊ．Ｊ．フィンドレイのカリキュラム論－イギリス新教育運動における教師の専門性をめぐって－，武庫川女子大学人文・社会科学編『武庫川女子大学紀要』査読無，第 55 巻，2007，21-30.

〔学会発表〕（計 2 件）

1. 山﨑洋子:「子どもの自由」と市民形成を考える－イギリス新教育運動研究を踏まえて－、関西教育学会第 61 回大会シンポジウム、大阪松蔭女子大学、2009 年 11 月 15 日、依頼。
2. Yoko Yamasaki: New Idealism and Realism in educational thought: discourses within and beyond the university in the publication of progressive education, History of

Education Society in UK, Faculty of Education, University of Cambridge, 2008. 09. 06.

〔図書〕（計 3 件）

1. リチャード・オルドリッチ著，山﨑洋子，木村裕三監訳『教育史に学ぶ－イギリス教育改革からの提言（*Lessons from History of Education*）』知泉書館，2009，全 445 頁。
2. 山﨑洋子：「バーフィールド言語論における言葉・実在・経験―イギリス新教育運動の基底としての人間観の解明に向けて―」平野正久編著『教育人間学の展開』北樹出版，2009.01, 144-161.
3. 山﨑洋子：「教育思想」日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』 研究社，2007, 101-5.

６． 研究組織

(1)研究代表者（YAMASAKI TOKO）

武庫川女子大学・文学部・教授

研究者番号：４０３１１８２３